

感情描写動詞の語彙と文法的特徴

山岡政紀

1. 感情描写動詞とは何か

本稿のテーマである感情描写動詞の定義を確認する前に、感情動詞分類*¹について確認する。まず、感情動詞*²とは、人の心理的現象に言及することを語彙的意味とし、経験者格*³を必須項として取る動詞の総称である。筆者はこれを〈感情表出〉という文機能*⁴を基準として三つに分類する。

ここで、〈感情表出〉とは、話者が発話時の自らの感情を表出する文機能であり、典型的には(1)aのような感情形容詞文において発動するが、(1)b, cとも、経験者格が第1人称に指定され、文の時制意味が現在であり、〈感情表出〉文となる動詞文の例である。

- (1) a ああ、苦しい。 + [I]^{Ex}*⁵
 b ああ、むかつく。 + [I]^{Ex}
 c ああ、腹が減った。 + [I]^{Ex}

bのように、文の述語がル形終止の時に〈感情表出〉となる動詞語彙が(A)「感情表出動詞」である。他に「痛む、腹が立つ、ドキドキする、虫酸が走る」などがある。

cのように、タ形終止の時に〈感情表出〉となる動詞語彙が(B)「感情変化動詞」である。タ形を用いてはいるが、変化後に維持されている感情状態を表現し、そのため時制意味が現在となる特殊な動詞である。他に「あきれた、困った、足がしびれた、肩が凝った」などがある。

そして、(2)のように、語彙的意味が人の感情に言及している点では(A)、(B)と共通しているが、ル形終止でもタ形終止でも〈感情表出〉とならない動詞語彙がある。

- (2) ??ああ、苦しむ/??ああ、苦しんだ。

この種の動詞は、他人の感情を客観的に描写することが主たる用法なので(C)「感情描写動詞」と呼ぶ。他に「怒る、苦しむ、喜ぶ、楽しむ、ガッカリする」など

がある。

感情という語彙的意味それ自体をその意味特徴から分類することができる。1 思考・2 情意・3 感覚・4 知覚の4分類である。これは上述の文機能論的な3分類に対して横断的な交差分類となる。

この4分類を区別する文法上のテストとして、山岡(2000b)4.1.2では三つの文法的特徴を提案した。第一に程度副詞の修飾が可能であるか、第二に補文を承けることができるか、第三に経験者格の部分ガ格*6を取るか、である。

[表]は両者の交差分類を一覧にし、意味特徴の4分類をテストする三項目を加えたものである。これによって、感情描写動詞は思考描写動詞・情意描写動詞・感覚描写動詞・知覚描写動詞に4分類される。

[表]感情動詞の文機能論的3分類と意味特徴による4分類の交差分類

感情動詞	1 思考	2 情意	3 感覚	4 知覚
A 感情表出動詞 [I]+V-ru	A-1 思考表出 ～と(～く)思う	A-2 情意表出 困る	A-3 感覚表出 胃が痛む	A-4 知覚表出 見える
B 感情変化動詞 [I]+V-ta	B-1 思考変化 ひらめく	B-2 情意変化 あきれれる	B-3 感覚変化 肩が凝る	
C 感情描写動詞	C-1 思考描写 ～を思う	C-2 情意描写 怒る	C-3 感覚描写 顔がほてる	C-4 知覚描写 見る
程度副詞修飾	×	○	○	×
補文を承ける	○	×	×	×
部分ガ格	×	×	○	×

※左端の欄に記載されている文型表示は、〈感情表出〉となる際の構文の型。[I]は省略可能な第1人称経験者格。V(動詞部)の後は、時制辞(異形態あり)を表している。

この分類による感情描写動詞の文法的定義は、「語彙的意味として人の感情を表現するが、ル形終止でもタ形終止でも〈感情表出〉とならない動詞語彙」ということになる。次節以降で、その意味的・文法的特徴について考察したい。

2. 感情描写動詞のテイル形は〈感情表出〉となるか

2.1 問題提起

ル形でもタ形でも〈感情表出〉とならない語彙を感情描写動詞とすることは1節で述べたが、すると、感情描写動詞を用いて〈感情表出〉文は全く作れないのか、別の形式によって可能なのか、ということが問題となる。これこそ、この語彙をめぐる最大の問題である。

〈感情表出〉の定義を改めて確認すると、「話者が発話時の自らの感情を直接的に言語化する文機能」となる。これを発動するための命題内容条件の第1は、「述語が感情性述語であること」である。感情描写動詞は感情動詞の下位分類である以上、これを満たしている。命題内容条件の第2と第3は、それぞれ「主語が第1人称経験者格であること」と「時制意味が現在であること」である。ところが、これらを満たす文を作ろうとしても、現在となるはずのル形では〈感情表出〉とならないばかりか、不適格な文となってしまったわけである。

(1) ?? 私は苦しむ。

そこで、主語は第1人称のまま、述語をテイル形とするとどうなるか。この場合、(2)のように文法的な文となる。

(2) 私は苦しんでいる。

この文の時制意味も現在であるから、まさに「話者が発話時の自らの感情を直接的に言語化する文機能」との定義に合致した〈感情表出〉のようにも見える。同じことは感情描写動詞のテイル形を述語とする文にはすべて共通して言えることである。

(3) 私は今、旅行を楽しんでいます。

(4) 私は試験の不合格にガッカリしています。

この問題を検討するのに先立って、感情表出動詞のル形とテイル形の対立について見ておきたい。

2.2 瞬間的現在と持続的現在

以下は、山岡(2000b)4.2.1からの引用である。

(5) ああ、腹が立つ。 + [I]^{Ex}

(5)は形式上は主語が省略されているが、(5)が発話されれば自動的に第1人称主語が含意される。その理由は、感情表出動詞のル形は主語が第1人称の場合にしか文法的にならないという制約があるからである。これはモダリティの人称制限と呼ばれた現象と連続している。

- (6) 私 }
 *あなた } は騒音に腹が立つ。
 *次郎 }

このことは、感情表出動詞のル形が〈感情表出〉専用の形式であることを示している。ところが、これをテイル形にすると、そのような人称制限がなく、いずれも文法的である。

- (7) 私 }
 あなた } は騒音に腹が立っている。
 次郎 }

このため、(2)~(4)の例文はいずれも第1人称主語を省略することができない。

このような両者の違いが生じる原因は、〈感情表出〉、〈感情描写〉という文機能それ自体の質に由来する時間的制約の問題と考えられる。

〈感情表出〉は外部からは見えない内面の心理を一時的に表出するものである。この〈感情表出〉を動詞という時間的制約の強い品詞によって行う場合、表出と発話との同時性が必然的に生じる。つまり、発話されている時だけその感情は表出されていることになる。実際の感情が継続していたとしても、言語的には〈感情表出〉と当該発話との同時性が保証されなければならない。感情表出動詞のル形はこの同時性を表現する形式である。

一方、〈感情描写〉は、表情や態度として持続的に表出されている感情を、二次的・間接的に描写するものであるから、描写と発話との間に同時性が求められることはない。発話時は持続する感情状態の一時点として、包含されればよい。これを表現するのに適した形式がテイル形である。テイル形は、その発話時が、発話時以前から以後へと継続する状態の一時点であることを表している。

このようなル形とテイル形の違いを示すのは、感情状態の持続を意味する副詞との共起が可能かどうかである。

- (8) *私はきのうからずっと腹が立つ。

- (9) 私はきのうからずっと腹が立っている。

上に見た二つの「現在」を区別する考え方は既に存在している。中右(1994)では、発話時と同時性のある現在を「瞬間的現在」(instantaneous present)と呼び、後者の発話時を包含する現在を「持続的現在」(durational present)と呼んで区別している。そして、この両者を区別する根拠として、やはり、持続性を表す副詞との共起の有無を挙げている。

- (10) a *わたしは つねづね/いつも トムが スパイだと思ふ。

b わたしは つねづね/いつも トムが スパイだ と 思っている。

中右(1994)はこの両者の区別をモダリティの定義の中に盛り込んでいるが、本稿における文機能は、従来のモダリティを純粹に意味範疇として捉え直したものであるから、その意味的特徴において共通することは自然なことである。

非過去形の時制意味が「瞬間的現在」となる述語語彙としては、感情表出動詞の他に、遂行動詞がある。例えば、「この子を正太と名づける」と宣言する場合、そう発話すること自体が命名の遂行に当たる。したがって、行為と発話との同時性が論理的に保証される。

さて、感情形容詞文では人称制限はあるが、持続性を表す副詞との共起が可能である。

(11) きのうちからずっと腹立たしい。 +[I]^Ex

その一方で、(12)のように、「瞬間的現在」と言うべき用例もある。

(12) (電車内で足を踏まれて) 痛いっ!

このことから、感情形容詞文の非過去形は「持続的現在」にも「瞬間的現在」にもなり得ると考える。形容詞という品詞は本来的に状態性を有しており、動詞と違って、いわゆるアスペクト的要素がもともとないことから、持続的か瞬間的かを規定する要素は形容詞そのものには含まれておらず、文中に共起する副詞や文脈などによって決定されることになる。その他の形容詞、名詞述語、狭義の状態動詞の非過去形についてもこれと同様のことが言える。

以上のことから、感情表出動詞のテイル形は、二次的な〈感情描写〉に適しているが、直接的な〈感情表出〉には適さない、ということになる。

2.3 感情描写動詞を排除する〈感情表出〉の命題内容条件

2.2では感情表出動詞を例にとって述べてきたが、感情描写動詞のテイル形についても全く同様のことが言える。

(9) 私はきのうちからずっと腹が立っている。 [持続的現在] [感情表出動詞]

(13) 私はきのうちからずっと怒っている。 [持続的現在] [感情描写動詞]

(9)と(13)がそのテンス・アスペクト上の特質において全く一致している点を見ても、感情描写動詞のテイル形が持続的現在であることが見て取れる。そして、テイル形においては、(14)に見られるように、人称制限が一切ないため、主語の省略はできない(文脈や場面などからの省略はあり得る)。つまり、(13)は他人の感情状態を描写するのと同じように、話者自身の感情状態を、いくらか客観的に描写しているのである。

- (14) 私
 あなた } は騒音に怒っている。
 次郎 }

感情描写動詞と感情表出動詞が異なるのは、ル形の時制意味においてである。感情表出動詞のル形は現在（ただし、瞬間的現在）となるのに対し、感情描写動詞のル形は現在とはならず、未来か超時となる。

(15) 私は、騒音に腹が立つ。 [瞬間的現在] [感情表出動詞]

(16) そろそろ返してくれないと、私、怒るよ。 [未来] [感情描写動詞]

(17) 父は、気に入らないことがあるとすぐ怒る。 [超時] [感情描写動詞]

このことは、感情描写動詞文が〈感情表出〉文を作ることができないことと表裏一体である。

以上により、〈感情表出〉の命題内容条件の初期条件において、テイル形を排除する⑤の項目が入っていたことが更に傍証を得たことになる（山岡(2000b) 2.4.2.1)。

— 〈感情表出〉の命題内容条件（初期） —

- ①述語が感情性述語であること
- ②主語が第1人称経験者格であること ([I]^{Ex})
- ③非過去時制辞を接続すること
 （ただし、述語が感情変化動詞の場合は、過去時制辞を接続すること）
- ④モダリティ付加辞*7を接続しないこと
- ⑤アスペクト接辞 -tei- を接続しないこと

つまり、〈感情表出〉は持続的現在を排除するものではないが（感情形容詞の場合など）、動詞を用いて〈感情表出〉を行う場合には、持続的現在は排除される。それが、動詞に持続性を与えるテイル形の排除へとつながるわけである。

この2節で問題提起した「感情描写動詞のテイル形は〈感情表出〉となるか」との問いに対する結論としては、「〈感情表出〉とはなり得ない」ということになる。

3. 感情描写動詞の文法的諸特徴

本節では、感情描写動詞の文法的特徴について、2節で考察した点以外に、アスペクト、ボイス、意味格、テンス、文機能の五つ範疇の観点から考察する。各

範疇は相互に関連しているが、便宜上、これらの範疇ごとに小節を立てて論述することにする。

3.1 感情描写動詞のアスペクト上の特徴

感情表出動詞のアスペクト的特徴については、山岡(1999)において、アスペクト形式が付加し得るといふ文法現象をもとに、金田一(1950)の4分類における「継続動詞」に類するものであることを論証した。

同時に、(1)が非文であることについても、分類とは無関係ながら言及した。

(1) *正夫は腹が立ちおわった。

これについては、～オウルをつけることができるのは、動きの全体量が決まっているものに限られると指摘した森山(1983)に言及するにとどめた。

このことをより正確に記述したのが三原(2000)であると言える。すなわち、三原(2000)では、金田一の4分類ではなく、Vendler(1967)の4分類に依拠している。両者の決定的違いは、金田一の「継続動詞」に当たるものが、Vendlerでは完了的 (telic) か未完了的 (atelic) かによって、「達成動詞 (accomplishment)」、「活動動詞 (activity)」の二つに区分されていることである。そして、上述の「動きの全体量が決まっていない」というのは、未完了的 (atelic) であるということに相当するので、結局、感情表出動詞は活動動詞に限定されることになる。つまり、感情表出動詞が未完了的であるというアスペクト上の特徴は、Vendler 分類に依拠する方が、より厳密に規定できることになる。この点において三原(2000)は、山岡(1999)をより厳密に規定し直したものと位置づけることができる。

これと同じく、感情描写動詞もまた、次の「悲しむ」に見られるように、活動動詞である。

(2) 彼は心から悲しんでいる。 [継続状態相]

(3) *彼は悲しみおわった。

また、感情変化動詞については、山岡(2000 a)で述べた通り、基本的に変化動詞 (到達動詞) であると筆者は考え、分類の名称に「変化」の語を用いている。

(4)は典型的な変化動詞だが、(5)もまた主観的な感覚において(4)と同様の結果状態相*⁸と見るべきである。

(4) 洗濯物が乾いている。 [結果状態相]

(5) のどが渴いている。 [結果状態相]

感情変化動詞の場合、通常の変化動詞と異なるのは、(6)のタ形も、テイル形と同様の結果状態相の解釈が可能で、時制意味が現在となることである。

(6) のどが渴いた。

詳細は山岡(2000 a)で一度述べているので略する。

3.2 感情描写動詞のボイス上の特徴

山岡(1999)において、(7)に見られるように、感情表出動詞と感情描写動詞との間で同語根の対応が見られる場合、必ず、感情表出動詞は自動詞、感情描写動詞は他動詞という関係性が見て取れた。

(7) 感情表出動詞(句)	——	感情描写動詞(句)
[補文]ような予感がする	——	[Ex]が[Ob]を予感する (思考)
[Ob]が気になる	——	[Ex]が[Ob]を気にする (情意)
[Ex]に[Ob]が見える	——	[Ex]が[Ob]を見る (知覚)

ここで「他動詞」としていたのは、対象格のヲ格を取る動詞のことであった。つまり、「横断歩道を渡る」のような場所格(経路)のヲ格などは考慮しないということである。

しかし、同語根の対応関係をもたない感情描写動詞を見ると、対象格のヲ格を取らないものは数多くある。例えば、「憤る、苛立つ、怒る、落ち着く、おののく、怯える、苦しむ、じれる、たじろぐ、戸惑う、悩む、迷う」などである。

一方、感情表出動詞の方は、構文としてヲ格を取ることがない。例外として「(怒り、嫌悪感、快感、不快感、など)を覚える」があるが、ヲ格名詞句が直接受動文の主語とならない点(*怒りが覚えられる)や、副詞がヲ格名詞句と動詞とを分断して挿入できない結合度の強さ(*怒りを非常に覚える)などから、これらは一種の成句として全体で一つの自動詞相当であると考えられる。

したがって、感情動詞分類と自他動詞の対立との相関のうえで言えることは、「感情表出動詞はすべて自動詞である」ということだけである。感情描写動詞においては、自動詞と他動詞とが混在していることになるので、相関があると言えない。

それよりもむしろ重要なことは、感情表出動詞の場合、経験者格がしばしば語彙的意味の中に取り込んで背景化し、無格の主題専用項となることである。(7)の感情表出動詞(句)の表示のうち、経験者項が示されていないものは、経験者が主題専用項であることを意味している。そして、その経験者主題は、通常、第1人称(=話者自身)であるのが自然である。本稿では以下、背景化している経験者格の表示([Ex])は省略する。

それに対して、感情描写動詞(句)では経験者格がガ格の形で項構造の一部を

成す。この両者の関係は自他動詞の関係というより、(8)のような、一部の感情形容詞と感情描写動詞との対応関係と似ている。

(8)	感情形容詞	——	感情描写動詞
	[Ob]が憎い	——	[Ex]が[Ob]を憎む
	[Ob]が惜しい	——	[Ex]が[Ob]を惜しむ

この対応関係も一種のボイス対立であることは確かだが、自他動詞の対立のように純粹に構文論的なボイス対立と違って、主題と述部との情報構造上の違いであり、さらにそれが文全体の文機能の違いに密接に関連している。この例では、経験者格を背景化した感情形容詞は〈感情表出〉に適し、経験者格名詞句を必須項とする感情描写動詞は〈感情描写〉に適している。この両者の対立を仮に「文機能論的ボイス対立」と呼ぶことにする。これについては、4節で各語彙ごとの具体的記述を行う際に、個々にその都度言及することにする。

3.3 感情描写動詞の意味格上の特徴

3.2では他動詞の定義を「対象格のヲ格を取る動詞」とした。場所格のヲ格を取っても他動詞とはしないのは、それが直接受動文の主語とならないなどの特徴による。そのような観点で見ると、感情描写動詞の中には、ヲ格名詞句を取るものの、それが直接受動文の主語とはならないものがある。(9)を直接受動化したのが(11)だが、これによると「憎む」のヲ格は対象格と言えるが、「嘆く」のヲ格は対象格とは言えない。

- (9) a 和夫は凶悪な犯人を憎んだ。 (10) a 凶悪な犯人は和夫に憎まれた。
 b 和夫は不運な事故を嘆いた。 → b *不運な事故は和夫に嘆かれた。

(9) b のヲ格は原因格と考える。その根拠は、山岡(2000b)1.3.3に記したように、格助詞句ノセイデと交替し得るものを原因格と考えるからである。ここで「ノセイデ」に置き換えられるのは、「嘆く」の方だけである。

- (11) a *和夫は凶悪な犯人のせいで憎んだ。
 b 和夫は不運な事故のせいで嘆いた。

原因格の読みしかないノセイデ格に置き換えることによって、「憎む」にとって対象格のヲ格が必須項であることが浮き彫りになる。

さらに、ヲ格とノセイデ格との共起は可能だろうか。

- (12) a 和夫は凶悪な犯人のせいで社会全体を憎んだ。
 b ??和夫は不運な事故のせいで社会全体を嘆いた。

すると今度は「憎む」の方が文法的となり、逆に「嘆く」の方は不適格な文と

なる。この不適格さは「嘆く」のヲ格が原因格の読みを要求するため、一文に同じ意味格が二度表れてしまうことによる不適格さと考えられる。以上から、同じヲ格を取る動詞でも、「憎む」を対象型、「嘆く」を原因型とすることができる。(10)に意味格表示を添えて(13)として再掲する。

(13) a 和夫は凶悪な犯人を憎んだ。

+ Ex + Ob + V → [対象型]

b 和夫は不運な事故を嘆いた。

+ Ex + Ca + V → [原因型]

この二者を峻別する限りにおいては、先に述べた直接受動化によって対象格と認めるテストと、ノセイデへの言い換えによって原因格と認めるテストとは、結果が一致することになるはずである。

ただし、直接受動化のテストは文法判断に迷うような周辺の用例が多く作られることに注意を払わなければならない。一般の動作動詞の例でも、「指名を受ける」「能力を持つ」のように対象格以外の解釈が難しいヲ格名詞句を取っていても、その直接受動文「*指名が受けられる」「*能力が持たれる」が意味的に非文となる例もある。直接受動化によって直接受動文の主語となるべき対象格名詞句には視点が移動されなければならないが、当該名詞句が意味的に視点を置きにくい名詞句の場合に起きる現象と考えられる。

さて、ここで対象型の動詞を他動詞、原因型の動詞を自動詞としてしまってもよいのだが、ここでの対象型と原因型との対立は、二格名詞句を取る情意描写動詞においても全く同様に見られることに注目する必要がある。

(14) a とし子は父親の過保護に (ノ*のせいで) 甘えている。

+ Ex + Ob + V → [対象型]

b とし子は父親の過保護に (ノのせいで) 悩んでいる。

+ Ex + Ca + V → [原因型]

(14) a の「甘える」のように、二格を取る「対象型」を他動詞と認めるのかどうかについては、もう一段の議論が必要かと思われる。本稿では、これ以上、自他動詞の別に拘泥せず、対象型、原因型の対立にとどめておく。特に4節の4.2ではこの区別により記述を行うこととする。

3.4 感情描写動詞のテンス上の特徴

感情動詞のテンス上の特徴については、本稿では2節までで十分論じてはいるが、ボイスの問題と関連させて論じた三原(2000)に対して、ここで改めて検証・

批判を行うことにする。

三原(2000)では、本稿の感情表出動詞と感情描写動詞の対立を述語の時制意味の対立として論じ、それを自他動詞の対立と関連するものとしている。すなわち、ル形の時制意味が未来となる(15)のような感情動詞(本稿の感情描写動詞)は他動詞であり、同じくル形の時制意味が現在となる(16)となるような感情動詞(本稿の感情表出動詞)は自動詞だということである。用例は同論考からの再掲である。

(15) b 親が悲しむぞ。

c そんなことをすると、子供が怖がるでしょ!

(16) a そんなこと、困るよ。

b あいつの喋り方はイライラする。

三原氏の主張によると、(15)の他動詞にはそれぞれ、「悲しい、怖い」という同語根の形容詞が存在するのに対し、(16)の自動詞には、そのような対応する状態表現がないから、動詞ル形でそれを代用しているのだという。つまり、対応する同語根の形容詞が存在せず、それに代わる状態表現として動詞のル形が用いられているという論法がとられていた。

この主張の問題点は、感情表出動詞「腹が立つ、痛む」に、それぞれ「腹立たしい、痛い」という感情形容詞が対応している事実が反例として指摘されることである。この二例には、同語根の感情描写動詞語彙も存在しており、その対応関係は(17)のようになる。

(17) 感情形容詞 — 感情表出動詞(句) — 感情描写動詞(句)

[Ca]が腹立たしい — [Ca]に腹が立つ — [Ex]が[Ca]に腹を立てる

[Ex=肉体部分]が痛い — [Ex=肉体部分]が痛む — [Ex]が[Ob=肉体部分]を痛める

さらに、三原氏が主張する他動詞と自動詞の区別は、本稿の感情描写動詞と感情表出動詞の区別と一致しているわけではなく、彼の言う「自動詞」には感情描写動詞である「苦しむ」も入っている。そうなる、これには「苦しい」という形容詞が対応しているので、もう一つの反例として付け加わることになる。

筆者は三原(2000)の草稿の段階でこの件について指摘したが、そのことは完成稿の注13で言及されており、自他動詞の別と、対応する形容詞の有無との間に完全なパラダイムが形成されているわけではない、との譲歩に至っている。つまり、対応する形容詞が存在するのは自動詞より他動詞の方が多い、といった、いわば一つの「傾向」くらいのものであると認めたことになる。

単なる傾向に過ぎないとした場合に、最大の問題となるのは、感情動詞の時制意味の対立(ル形が現在となるか、未来となるか)が、アスペクトやボイスなど

の他の文法範疇と関連づけることができないということである。結局この問題は、感情表出動詞と感情描写動詞との語彙範疇の区別として他の文法範疇と関わりなく偶然的に発生する文法現象と見る以外にないと考える。

三原(2000)のもう一つの問題は、感情表出動詞が感情形容詞の代わりをしているとしたのでは、両者の時制意味上の違いを見過ごしてしまうのではないか、ということである。2節で述べたように、感情表出動詞文の現在時制意味は「瞬間的現在」に限定されているのに対し、感情形容詞文の現在時制意味には「瞬間的現在」と「持続的現在」の区別がなく、文中に共起する副詞や文脈によって、意味的に制限されることがあり得るというに過ぎない。つまり、「腹が立つ」は瞬間的現在に限定されるが、「腹立たしい」は瞬間的現在なのか、持続的現在なのかは限定されていないと考える。

3.5 感情描写動詞の文機能上の特徴

感情描写動詞の機能は、人の感情現象を客観的に描写することである。その場合、人というものは圧倒的に話者から見て他人の場合が多いであろうが、話者自身の場合も当然考えられる。

現象を描写する文機能は、〈演述〉の下位分類としての〈描写〉である。現象に「状態」と「事象」の2種があるので、〈描写〉にも、〈状態描写〉と〈事象描写〉の2種類があることになる。さて、「感情」という現象は「状態」と「事象」のいずれに当たるのであろうか。

感情形容詞については、例外なく「状態」と考えるべきだが、感情動詞の場合は、通常、ル形・タ形では「事象」、テイル形・テイタ形では「状態」と考えるべきである。要するに、アスペクト接辞 *-tei-* を付加しないものは「事象」、付加している場合は「状態」ということである。

ここでは、典型的な感情描写動詞の一つである「恐れる」を例に、实例を通して、各用例の文機能について考えたい。述語「恐れる」の下線は引用者による。

最初に、(18)と(19)はル形の例である。

(18) これをきくと野島はある刺戟をうけた。しかし杉子とあそぶ時は大宮のことも、脚本をかくことも忘れた。ただ杉子の帰る時がせまってくるのを恐れるだけだった。杉子はもう野島にはすっかり親しくなった。(友情)

(19) ——己は復讐を恐れると云った。それも決して嘘ではない。(袈裟)

それぞれの主語は、(18)が第3人称の「野島」、(19)は第1人称の「己」である。いずれも、ル形ではあるが、内容的には過去のそれぞれの人物の感情を事象として描写したものである。描写にはそれぞれ根拠があるはずだが、(18)は小説に特有の登場人物に対する感情移入により、過去のある時点に「野島」に生じた感情を描写している。(19)は自らが「恐れる」と発話したことを事象をとって描写している。

次にタ形の例を挙げる。

(20) あきらかに彼はそのような断定的な言いかたに馴れていなかったのだ。では、その絵の下手糞な頼央のことをなぜ調べているのか、という彼の反論をきっかけに、美術に関する知的な会話が始まることを彼は恐れた。(エディ)

(21) 私はただKが急に生活の方向を転換して、私の利害と衝突するのを恐れたのです。(こころ)

主語は、(20)が第3人称の「彼」、(21)が第1人称の「私」である。いずれも、過去のある時点に生じた感情を描写したものである。(21)においても、自身の感情の生起を客観的に述べようとするものである。

次にテイル形の例を挙げる。

(22) エディは金を借りるという立場になるのを極端に恐れているようだった。(一瞬)

(23) この己を、この臆病な己を追いやって罪もない男を殺させる、その大きな力は何だ？ 己にはわからない。わからないが、事によると——いやそんな事はない。己はあの女を蔑んでいる。恐れている。憎んでいる。しかしそれでも猶、それでも猶、己はあの女を愛しているせいかも知れない。(袈裟)

主語は、(22)が第3人称の「エディ」、(23)が第1人称の「己」である。(22)は文末に過去時制辞があるので、過去の時点での持続的な感情状態を描写したものということになる。(23)は登場人物のせりふの一部だが、自分自身の感情を、発話時を含む持続的な感情として客観的に描写しようとしている。これは、主語が第1人称で、時制が現在であっても〈感情表出〉ではなく、〈感情描写〉であるとする2節の(2)~(4)に類する用例である。

最後にテイタ形の例を挙げる。

(24) 先生はそれだけでなく、冷たい眼で研究されるのを絶えず恐れていたのである。(こころ)

(25) 私は帰った当日から、或はこんな事になるだろうと思って、心のうちで暗にそれを恐れていた。(こころ)

主語は、(24)が第3人称の「先生」、(25)が第1人称の「私」である。いずれも過去のある時点における持続的な感情状態を客観的に描写しようとするものである。

以上を総括すると、(18)~(21)は〈事象描写〉、(22)~(25)は〈状態描写〉に類することになる。つまり、「感情」という現象の範疇は、〈感情表出〉という文機能においては、一つの独立した現象としての特殊な地位が与えられるが、〈感情描写〉においては、「事象」と「状態」のいずれかに類する横断的な範疇であることになる。そこで、次節における語彙・用例の記述的考察においては、より厳密さを追求するために、〈感情事象描写〉、〈感情状態描写〉というように、区別して記述することにする。

4. 感情描写動詞文の構文・述語語彙・用例

前節までで、感情動詞の分類、感情描写動詞の文法的特徴などについては詳しく考察した。本節では、感情描写動詞文の用例を示しつつ、構文の命題構造、文機能などを記述する。その際、語彙をなるべく多く挙げる。1節での分類に従って、記号Cを用いる。

4.1 思考描写動詞

感情描写動詞のうち、補文を承けることのできる語彙が思考描写動詞である。

最初に、思考表出動詞と重複して属する「思う」、「考える」について述べる。この両語は、その取る補語（補文）をもとに、述語の構文に主に三種あることが知られている。

- ① [補文] ト/ヨウニ/ナンテ+思う (考える)
- ② ([名詞句] ヲ+) [形容詞] ク/ニ+思う
- ③ [名詞句] ヲ+思う (考える)

このうち、①、②の構文は、〈感情表出〉の一種である〈思考表出〉に用いることができるので、思考表出動詞とした。(1)は②の例。これも形容詞文を補文とする一種の補文構造と言える。しかし、③は〈思考表出〉に用いることができず、(2)は非文となる。

- (1) 母を恋しく思う。 + [I]^{Ex}
- (2)*私は故郷を思う。

したがって、「思う」、「考える」は、③の構文で用いられる場合のみ、思考描写動詞ということになる*9。

「思う」に別の動詞を下接する複合動詞の中には、単独の「思う」と違って、構文の如何によらず〈思考表出〉となり得ない語彙がある。「思い起こす、思い知る、思い立つ、思いつめる、思い直す」などである。これらの語彙に②の構文はなく、上述の①、③の構文において思考描写動詞となる。また、「思い込む」には補文をトで承ける①の構文しかないが、思考描写動詞に分類される語彙である。

次に、文機能ごとに用例を挙げる。引用者により、述語となっている思考描写動詞に下線、経験者格名詞句（文脈上、効力のあるものを含む）に二重下線、対象格名詞句または補文に波下線を引く。

〈思考事象描写〉

- (3) ネオンの点滅によって暗い紅色や黄土色に変化する空を見上げながら、私は五年前を思った。まだ二十代のなかばだった私と内藤との奇妙な旅を思った。朝鮮半島の入口、釜山でのやはり暑かった夏を思った。（一瞬）
- (4) 栄二は少し待ってもらいたいと頼み、仮牢へ戻って一日考えてみた。芳古堂のことを思い、綿文のことを思い、目明しのことを思った。（さぶ）
- (5) “プロフェッサー・フジワラ”が、コロラドの乾燥した空気に心地良く響いた。私は、ここではうまく行きそうだと予感した。（若き）
- (6) 悲しい事に私は片眼でした。私はただKが御嬢さんに対して進んで行くという意味にその言葉を解釈しました。果断に富んだ彼の性格が、恋の方面に発揮されるのが即ち彼の覚悟だろうと一閃に思い込んでしまったのです。（こころ）
- (7) そうして、自分が、彼にまつわりついている間に、自分のお道化は、所謂「ワザ」では無くて、ほんものであったというよう思い込ませるようあらゆる努力を払い、あわよくば、彼と無二の親友になってしまいたいものだ、もし、その事が皆、不可能なら、もはや、彼の死を祈るより他は無、とさえ思いつめました。 +[I]^{Ex}（人間）

このうち、(3)と(4)は述語が「思う」ではあるが、ヲ格を取っているので、非過去時制であっても、〈思考表出〉にはなり得ない。

一方、(5)~(7)は引用節をトで承けているが、たとえ形でも〈思考表出〉には

用いられない思考描写動詞である。

〈思考状態描写〉

- (8) 洗いざらいをいうとね、ぼくは三年前、成長したふじ子さんに会った時、ひと目ぼれをしたようなんだ。それでふじ子さんの婚約の話を聞いた時は、とても淋しかった。しかしふじ子さんが病気になり、その間いく度か手紙をやりとりしながら、ぼくはずいぶんふじ子さんのことを思っていたつもりだ。 (塩狩峠)
- (9) 父は自分の達者な保証を自分で与えながら、今にも己れに落ちかかって来そうな危険を予感しているらしかった。 (こころ)
- (10) 鮎太は何を勉強しても、自分で他の生徒より出来るものと思いつめていた。 (あすなろ)
- (11) 「だって、太郎は、明倫へは、あんまり行きたくないんでしょう。北川だけしか自分の入る大学はない、と思いつめてるんでしょう」 (太郎)

ここに挙げた4例は、〈思考事象描写〉の用例に挙げた、「思う、予感する、思い込む、思いつめる」のそれぞれテイル形・テイタ形の用例である。いずれもある時点における持続的な思考状態を描写したものである。(8)、(9)では対象格のヲ格を取り、(10)、(11)では引用節をトで承けている。

以上を整理して一般化した記述は以下のようなになる。

C-1 思考描写動詞文

【命題】 [経験者(Ex)] ガ + $\left\{ \begin{array}{l} \text{[対象(Ob)] ヲ} \\ \text{[補文] ト/ヨウニ/ナンテ} \end{array} \right\} + V$

【述語語彙】 案じる、思う、思い起こす、思い浮かべる、思い込む、思い知る、思い立つ、思いつめる、思い直す、思いめぐらす、思いやる、回想する、考える、勘ぐる、感じる、心に浮かべる、心に描く、推量する、想像する、予感する、……

【文機能】 V-T 〈思考事象描写〉

V-tei-T 〈思考状態描写〉

この中で、【文機能】に関しては、述語動詞(V)と時制辞(T)とが直接接続する場合には〈思考事象描写〉、両者の間にアスペクト接辞 -tei- を挿入するもの (い

わゆるテイル形、テイタ形)は〈思考状態描写〉, という意味である。

ところで、「思う」が補文を承げるか、対象格名詞句を取るかで思考表出動詞と思考描写動詞の対立を成したのと同様に、両者の対立を成す例が2例ある。その対応関係を示すと(12)のようになる。

- | | | | |
|------|--------------|----|----------------|
| (12) | 思考表出動詞(句) | —— | 思考描写動詞 |
| | [補文]と思う | —— | [Ex]が[Ob]を思う |
| | [補文]ような予感がする | —— | [Ex]が[Ob]を予感する |
| | [補文]ような感じがする | —— | [Ex]が[Ob]を感じる |

ただし、思考表出動詞の場合は必ず助詞ガを挿入しなければならず、このガ格と思考描写動詞における対象格のヲ格とは、3.2で述べた「文機能論的ボイス対立」の関係にある。

4.2 情意描写動詞文

感情描写動詞のうち、程度副詞の修飾をうけることができ、かつ部分ガ格を取らない語彙が情意描写動詞である。これは、「喜ぶ、怒る、悲しむ、楽しむ」といった、喜怒哀楽の情緒的な意味を表す典型的な感情動詞群であり、語彙の量、用例の量ともに、最も豊富である。そこで本節では、3.3での論述をもとに、情意描写動詞を対象型と原因型とに分け、各型ごとに用例を検討し、記述の一般化を行うことにする。

4.2.1 単独・対象型

対象型、すなわち対象格名詞句を必須項として取る情意描写動詞について、「ためらう、恨む、憧れる、こだわる」の4語を述語とする実例を、〈情意事象描写〉と〈情意状態描写〉に分けて以下に挙げる。下線については、以下、すべて4.1と同様である。

〈情意事象描写〉

- (13) 信夫は、キリスト信者かと尋ねることをためらった。(塩狩峠)
- (14) 八時五分ぐらい前に目をさました。雨が降っていた。屋根がしっとりとぬれている。残念だなあと雨を恨んだ。+[I]^{Ex}(二十歳)
- (15) 太郎は海の世界に憧れた。(太郎)
- (16) 「あなたはわりあい、おかねの事にこだわるのね」(青春)

〈情意状態描写〉

- (17) 一審では有罪にしたものの、星は控訴中で確定した判決はまだだ。

この段階で他社に移しては、問題になる。〔総督府は〕態度の決定をためらっていた。（人民）

(18) 「主よ。あなたがいつも沈黙してられるのを恨んでいました」
+ [I]^{Ex} （沈黙）

(19) なにしろ一風毛色の変ったことが彼女の好みであったし、アグネスの青い瞳、下手糞な日本字はそういう藍子の気性にぴったりした。それに彼女はこのところ外国に憧れてもいた。（楡家）

(20) そして、それとなく目顔であいずをしたが、大石先生はそしらぬ顔で、まだ後藤先生にこだわっていた。（二十四）

「ためらう、恨む」は対象格をヲ格で取り、「憧れる、こだわる」は対象格をニ格で取っている。これに類する語彙をかき集めてみると、語彙数としてはヲ格を取るものの方が多いようである。

また、このうちの(18)は経験者格が第1人称だが、自身の情意を振り返りながら客観的に述べている例であり、〈情意表出〉ではないことが用例から見て取れる。

以上を整理して一般化した記述は以下のようになる。

C-2-a 情意描写動詞文〔単独・対象型〕

【命題】 ① [経験者(Ex)] ガ+ [対象(Ob)] ヲ+ V

② [経験者(Ex)] ガ+ [対象(Ob)] ニ+ V

【述語語彙】 ①愛する、崇める、侮る、憐れむ、悼む、厭う、愛おしむ、訝しむ、訝る、忌む、忌み嫌う、いやしむ、うたぐる、疎む、敬う、恨む、うらやむ、憂う、怠る、惜しむ、思いやる、思い煩う、嫌う、毛嫌いする、こらえる、蔑む、慕う、偲ぶ、心配する、好く、そねむ、尊ぶ、ためらう、躊躇する、懐かしむ、憎む、妬む、はばかり、ひがむ、見下す、見くびる、……

②憧れる、甘える、かぶれる、興じる、傾倒する、恋する、こだわる、根負けする、心酔する、心服する、耐える、惚れる、……

【文機能】 V-T 〈情意事象描写〉

V-tei-T 〈情意状態描写〉

ところで、この種の語彙には、共通の語根を持つ情意形容詞が対応しているものが少なくない。

(21) 情意形容詞 ——— 情意描写動詞

[Ob]が訝しい ——— [Ex]が[Ob]を訝しむ、訝る

[Ob]が忌まわしい — [Ex]が[Ob]を忌む

[Ob]が疎ましい — [Ex]が[Ob]を疎む

ここには、3例示したが、これと同じ対応関係のものに、「恨めしい—恨む、羨ましい—羨む、惜しい—惜しむ、嫌いだ—嫌う、懐かしい—懐かしむ、憎い—憎む、妬ましい—妬む」などがある。また、対象格を二格で取る「恋する」にも形容詞「恋しい」が同様に対応している。これらは、3.2で述べた文機能論的ボイス対立の具体的事例である。

また、共通の語根を持つ属性形容詞が対応している例もわずかながらある。

(22) 属性形容詞 — 情意描写動詞

[Ob]が哀れだ — [Ex]が[Ob]を憐れむ

[Ob]がいやしい — [Ex]が[Ob]をいやしむ

しかし、属性形容詞には経験者項が存在しないので、上述のボイス対立の類似現象として指摘するにとどめたい。

4.2.2 単独・原因型

原因型、すなわち原因格名詞句を任意項として取る情意描写動詞について、「悲しむ、喜ぶ、憤る、怯える」の4語を述語とする実例を、〈情意事象描写〉と〈情意状態描写〉に分けて以下に挙げる。下線は原因型の場合には原因格に二重下線とする。他は4.1と同じ。

〈情意事象描写〉

(23) 自殺をしたら、バイト先では、へエあの娘がねエと、ちょっぴり驚かれ、それで二、三日たてば終りさ。かあちゃんやとうちゃんは悲しむ (悲しむ?) かもしれねエな。(二十歳)

(24) ああ。柳生のお婆さん。あの人にだけは会いたいですね。どうしていましたか。元気だったでしょうか。わたしも会いたいし、彼女の方でも、もしわたしが智広をつれて行けば喜ぶことでしょう。(エディ)

(25) それは金額に見積ると、私の予期より遙かに少ないものでした。私としては黙ってそれを受け取るか、でなければ叔父を相手取って公け沙汰にするか、二つの方法しかなかったのです。私は憤りました。又迷いました。(こころ)

(26) おきぬも花カンザシを、あやうく飛ばされるところだった。彼女はもう、それだけで、すっかりおびえてしまった。(路傍)

〈情意状態描写〉

- (27) 亡くなったお父さんは、どないに悲しんでいられるやろ。(金閣寺)
- (28) ハトは、コンクリートの上に散乱しているポップコーンをせわしない首の振り方でつえばみ、喰い散らかしている。男の子はそれを見て、キャッキヤと声を上げて喜んでいた。(一瞬)
- (29) 「加島さん、お母さんに渡したと言って憤っていたわ」(あすなろ)
- (30) 自分は神にさえ、おびえていました。(人間)

以上、8例のうち、原因格名詞句が同一文中に表れているものは最後の(30)だけである。しかし、どの例を見ても述語語彙が表す情意を引き起こした原因が何であるかは文脈から読み取れるものばかりである。対象型情意描写動詞の対象格が構文上の必須項であったのに対し、原因型情意描写動詞の原因格は意味的に必要だとしても、構文上の項としては任意項であると言える。

原因格名詞句の形を取る場合の形式格は、「悲しむ、喜ぶ」ではヲ格、「憤る、怯える」ではニ格であることに異論は出ないであろう。これに類する語彙をかき集めてみると、語彙数としては、対象型の場合とは反対にニ格を取るものの方が多いようである。

以上を整理して一般化した記述は以下のようなになる。

C-2-b 情意描写動詞文〔単独・原因型〕

【命題】

- ① [経験者(Ex)] ガ+ [原因(Ca)] ヲ/ニヨッテ/ノセイデ+V
- ② [経験者(Ex)] ガ+ [原因(Ca)] ニ/ニヨッテ/ノセイデ+V

【述語語彙】

- ① 恐れる、悲しむ、悔いる、悔やむ、楽しむ、嘆く、恥じる、誇る、喜ぶ、……
- ② 飽き飽きする、焦る、慌てる、憤る、勇む、苛立つ、浮かれる、打ち解ける、うぬぼれる、うろたえる、怒る、驕る、怖じ気づく、落ち着く、おののく、怯える、思い上がる、歓喜する、気落ちする、逆上する、興ざめする、驚嘆する、挫ける、くつろぐ、苦しむ、激怒する、懲りる、しょげる、白ける、じれる、たじろぐ、動揺する、戸惑う、納得する、悩む、はにかむ、ひるむ、吹っ切れる、閉口する、辟易する、ふさぐ、奮い立つ、舞い上がる、惑う、迷う、まごつく、めげる、面食らう、滅入る、落胆する、……

【文機能】 前項に同じ

原因型・情意描写動詞の場合にも、情意形容詞との間に同語根の対応関係があるものが相当数見られる。

- | | | |
|------------|----|---------------|
| (31) 情意形容詞 | —— | 情意描写動詞 |
| [Ca]が恐ろしい | —— | [Ex]が[Ca]を恐れる |
| [Ca]が悲しい | —— | [Ex]が[Ca]を悲しむ |
| [Ca]が悔しい | —— | [Ex]が[Ca]を悔やむ |

ここに示した3例と同じ対応関係のものに、「楽しい—楽しむ、嘆かわしい—嘆く、恥ずかしい—恥じる、誇らしい—誇る、喜ばしい—喜ぶ」などがある。原因格を二格で取る動詞の場合でも、次のような対応例が見られる。

- | | | |
|------------|----|------------------------------|
| (32) 情意形容詞 | —— | 情意描写動詞 |
| [Ca]が苦しい | —— | [Ex]が[Ca]に苦しむ |
| [Ca]がじれったい | —— | [Ex]が[Ca]にじれる* ¹⁰ |

また、共通の語根と言えるか微妙だが、情意表出動詞と対応していると思われる例が1例ある。

- | | | |
|-------------|----|---------------|
| (33) 情意表出動詞 | —— | 情意描写動詞 |
| [Ca]にイライラする | —— | [Ex]が[Ca]に苛立つ |

以上は、3.2で述べた文機能論的ボイス対立の具体的事例である。

さらに、共通の語根を持つ属性形容詞が対応している例も、やはりわずかながらある。ただし、属性形容詞のガ格に表れるのは原因格ではなく、対象格である。

- | | | |
|------------|----|-----------------------------|
| (34) 属性形容詞 | —— | 情意描写動詞 |
| [Ob]が勇ましい | —— | [Ex]が[Ca]に勇む |
| [Ob]が悩ましい | —— | [Ex]が[Ca]に悩む* ¹⁰ |

しかし、(2)と同様、経験者項が存在しないので、あくまでも類似現象として挙げるにとどめる。

4.2.3 成句表現・対象型

情意描写動詞にも慣用的な成句表現が非常に多く、一部に特殊な構文も見られるので、別個に小節を立てて整理したい。

ここでは、格助詞が用いられているもののみを成句として扱い、「奮い立つ、思いつめる」などのような、いわゆる複合動詞は成句ではなく、単独の動詞として扱う。

成句表現による情意描写動詞文も、対象型と原因型に大別できる。

以下に対象型の実例として、「気を配る、気に病む、気に障る、骨身に浸みる」

を述語とする用例を挙げる。

〈情意事象描写〉

(35) 私は、彼女の昼寝を守るために、前よりも一層、廊下の足音や、窓から飛びこんでくる蜂や虻などに気を配り出した。(風立)

(36) ほう、そんなに首すじが凝る？ いやねえ、そんなことを気に病んじゃいけませんよ。+ [II]^{Ex} (楡家)

(37) 彼は実は娘を手放したくないと思っている男親の本能が荒々しく揺さぶられたのに気がついた。妻が乳母の差出た行為を咎めもせず、民の話に一々頷いているのも甚だしく気に障った。(華岡)

(36)は相手の情意をまず描写しており、そのうえで発話機能として《助言》となっているものである。(37)では対象格が副助詞^モで取り立てられているが、ガ格と認められる。

〈情意状態描写〉

(38) 彼らはまるで一步一步の歩幅をものさしで測りながら歩いているみたいに、実に細かいところにまで気を配っていた。(世界)

(39) と、ちょっと皮肉を言っただけであったが、現在秋田木工の東京営業所長をしている従兵長の近江兵治郎は、ミッドウエーの折の鯛の味噌焼と併せて、今でも少し、このことを気に病んでいるようである。(山本)

(40) 彼の少年時代、長岡にはランプ用の石油を作る町工場が何百軒とあって毎日のように火事が起り、古い長岡の人にとって、いい意味でも悪い意味でも石油というものは骨身にしみているところがあった。(山本)

(40)は、「気に障る」の〈情意状態描写〉は実例が採集できなかったので、同じ構文を取る成句「骨身にしみる」の例を挙げたものである。ここでも係助詞^ハによって取り立てられている対象格はガ格であると認められる。ともあれ、この種の成句は、経験者格がニ格やニトツテ格で表れ、対象格がガ格で表れるという点で、可能構文や所有構文に似た構文構造を取る語彙である。

上に挙げた用例以外にも多くの実例を採取したが、それらから帰納すると、対象型の成句表現では、成句中に用いられる格助詞が何であるかによって3種類の構文を取ることがわかる。成句で用いられる格助詞がヲ格の場合、対象格はニ格で表示され(例文(41))、成句でニ格が用いられる場合には、対象格はヲ格で表示される場合(例文(42))とガ格で表示される場合(例文(43))とがある。下記の一般

化における命題，述語語彙の番号を書き添えておく。

- (41) 権吉は上司の機嫌に気を配っている。 →①
 (42) 権吉は上司のいじめを気に病んでいる。 →②
 (43) 権吉には上司の言葉づかいが気に障るらしい。 →③

なお，経験者格が成句中の名詞の所有者として連体格で表れ，「[対象] が [経験者] の気に障る」，「[対象] が [経験者] の骨身に浸みる」といった構文を取ることもある。

- (44) 「おまえさんの気に障るかもしれないが」と与平はいつになく強気な調子で云った， (さぶ)

以上を整理して一般化した記述は以下ようになる。

C-2-c 情意描写動詞文 [成句・対象型]

【命題】

- ① [経験者(Ex)] ガ + [対象(Ob)] ニ / ニ対シテ + [NヲV]
 ② [経験者(Ex)] ガ + [対象(Ob)] ヲ + [NニV]
 ③ [経験者(Ex)] ニ / ニトツテ + [対象(Ob)] ガ + [NニV]
 [対象(Ob)] ガ + [経験者(Ex)] ノ + [NニV]

【述語語彙】

- ① 愛想を尽かす，気をつける，注意を払う，……
 ② 気にする，気に病む，根に持つ，……
 ③ 気に障る，逆鱗に触れる，骨身に浸みる，胸につかえる，……

【文機能】 前項に同じ

4.2.4 成句表現・原因型

原因型の方は，4.2.2で見た，単独の情意描写動詞を述語とする構文と基本的に同じだが，成句中に用いられる格助詞はやはり，ヲ，ニ，ガの3種類がある。ここでは，「胸（心）を痛める，腹を立てる，途方に暮れる，胸がつまる」の実例を挙げる。

〈情意事象描写〉

- (45) その知人の家に居りますと，急に往来の人通りがはげしくなつて，あれを見い，あれを見いと，罵り合う声が聞えます。何しろ，後暗い体ですから，娘は又，胸を痛めました。 (運)
 (46) わたしが夜這いをかけたただの，手籠めにしたただの，それでもって珠

子をたらしこんだのだなどという、それはひどい噂で、わたしは自分よりも珠子のために腹を立てました。(エディ)

(47) 自分はヒラメの家を出て、新宿まで歩き、懐中の本を売り、そうして、やっぱり途方にくれてしまいました。(人間)

(48) 喜助は、人形のどの部分にも父の精魂がこめられているような気がして、胸がつまった。(越前)

〈情意状態描写〉

(49) 阿片および貿易部門の責任者として、安楽は事件の当初から非常に心を痛め、気をもんでいた。(人民)

(50) 彼女は生物の教師からわざと答えられないような質問をされ、恥をかかされたと思い、ひどく腹を立てていた。怒りっぽい娘だった。(エディ)

(51) 仕様がなことは分ってるんだが、……しかし浜田君、僕は実際に困ってるんですよ。どうしたものか途方に暮れているんですよ。(痴人)

(49)では「気をもむ」という成句も並列されているが、これも同種の情意描写動詞であり、下線を施した。なお、「胸がつまる」の〈情意状態描写〉の用例は採集できなかった。

これら7例のいずれにおいても、原因格が名詞句の形を取っているものはない。これについては、4.2.2で単独の原因型について見たのと同じことが言える。

以上を整理して一般化した記述は以下ようになる。

C-2-d 情意描写動詞文〔成句・原因型〕

【命題】

[経験者(Ex)] ガ+ [原因(Ca)] ニ/ニヨッテ/ノセイデ+ $\left\{ \begin{array}{l} \textcircled{1} [NヲV] \\ \textcircled{2} [NニV] \\ \textcircled{3} [NガV] \end{array} \right.$

【述語語彙】

①頭を悩ます、意地を張る、固唾をのむ、気分を害する、気を取り直す、気をぬく、気をもむ、肝をつぶす、肝を冷やす、業を煮やす、心を痛める、心を砕く、力を落とす、熱を上げる、恥をかく、腹を立てる、へそを曲げる、臍をかむ、胸を痛める、胸を焦がす、胸をなで下ろす、我を忘れる、……

②呆気にとられる、思いにふける、途方に暮れる、夢中になる、我に返る、……

③気が変わる, 気が沈む, 胸がつまる, 目がくらむ, 溜飲が下がる,
.....

【文機能】 前項に同じ

この中には、成句の内部構造が、情意表出動詞とボイス的な対立を有しているものがいくつかある。これらはすべて、情意表出動詞は自動詞的、情意描写動詞は他動詞的という対立となっている。以下は、山岡(2000b)4.2.4からの再掲である。

(52) 情意表出動詞句	——	情意描写動詞句
[Ob]に愛想が尽きる	——	[Ex]が[Ob]に愛想を尽かす
[Ob]が気になる	——	[Ex]が[Ob]を気にする
[Ca]に腹が立つ	——	[Ex]が[Ca]に腹を立てる
[Ca]に胸が痛む	——	[Ex]が[Ca]に胸を痛める

ここで、自動詞的・他動詞的として、自動詞・他動詞とはしなかった理由としては、成句全体を直接受動化して「胸が痛められる」のような直接受動文を作ることができない。したがって、形式上のヲ格である「愛想、腹、胸」は、いわゆる目的語とは言にくい。先にも述べたように、程度副詞が成句を分断する位置に表れない(*腹を非常に立てる)ことから意味的結合度も強い。

こうして、成句全体を一つの動詞と見立てれば、「腹が立つ」も「腹を立てる」も両方とも自動詞と言うべきである。ただし、情意表出動詞句の方は、成句中にガ格名詞句が用いられているために、経験者格が無格となって背景化し、3.2で述べた文機能論的ボイス対立となるのである。

この場合、成句の内部構造としての格助詞と動詞形態の自他動詞的対立が、そのまま、〈情意表出〉に用いられる情意表出動詞句なのか、〈情意描写〉に用いられる情意描写動詞句なのかという、文機能論的ボイス対立に集約されており、興味深い現象である。

4.2.5 擬態語(原因型)

擬態語サ変動詞の形を取った情意描写動詞も数多くある。この種の語彙には対象格名詞句を取るものではなく、いずれも原因型となる。ここでは、「ソワソワする、ボンヤリする、モジモジする」の3語について、实例を挙げる。これらの例でも、やはり原因は名詞句の形を取っていない。

〈情意事象描写〉

- (53) 時たま御嬢さん一人で、用があって私の室へ這入った序に、其所に坐って話し込むような場合もその内に出て来ました。そういう時には、私の心が妙に不安に冒されて来るのです。そうして若い女とただ差向いで坐っているのが不安なのだとはばかりは思えませんでした。私は何だかそわそわし出すのです。(こころ)
- (54) なにかをやりはじめてもその途中で極って自分はほんやりしてしまった。(泥濘)
- (55) いい洋服だと、外山も、外山の妻の松枝もほめてくれたが、ほめてもらいたい園子はさっぱり姿を見せなかった。二階にいる様子さえないのである。加藤は、なんとなくもじもじした。(孤高)

〈情意状態描写〉

- (56) 小柳静は決してオレの趣味じゃないと思いながら、五月さんと一緒に町を歩ける嬉しさで、太郎はそわそわしていた。(太郎)
- (57) 一台の自動車が、それを避けている私には一顧の注意も払わずに走り過ぎて行った。しばらく私はほんやりしていた。(冬の蠅)
- (58) 戦友がそばに行くと、その僧は草の中に身をかくすようにしゃがんで、卑屈な笑いをうかべてもじもじしていました。(ビルマ)

以上を整理して一般化した記述は以下のようになる。

— C-2-e 情意描写動詞文 〈擬態語〉 —

【命題】 [経験者(Ex)] ガ+ [原因(Ca)] ニ/ノセイデ+ V

【語彙語彙】 あたふたする、いじいじする、ウジウジする、うかうかする、うっかりする、ウツトリする、おたおたする、おちおちする、おどおどする、オロオロする、カッカする、カッとする、ガツカリする、ガツクリする、カリカリする、キョトンとする、グツタリする、ぐずぐずする、クヨクヨする、ケロリとする、げんなりする、シヨンポリする、しんみりする、スッキリする、ソワソワする、ダラダラする、ドギマギする、のんびりする、ビクビクする、びっくりする、ポーッとする、ボヤボヤする、ホロリとする、ボンヤリする、マゴマゴする、ムカッとする、ムツとする、メソメソする、モジモジする、ヤキモキする、……

【文機能】 前項に同じ

以上で、情意描写動詞に関する記述を終える。

4.3 感覚描写動詞

経験者格の肉体部分をガ格で取る構文だが、語彙も用例も多くは見られない。この構文では、経験者格自身は格助詞ノによって肉体部分を連体修飾しているか、さもなければ主題として背景化することになる。ここでは、「ほてる」と「張る」の用例を挙げる。肉体部分に波下線を施す。

〈感覚事象描写〉

- (59) やはり、気に病むほどのことはなかったらしい。[男は] ほっとすると、いきなり顔の内側が、ごくごく脈うちながら火照りだした。
(砂の女)

- (60) タオルで拭いてもらっている間は気持がよかったです、終わるとかえって前よりも体が火照って来ました。+[I]^{Ex} (錦繡)

〈感覚状態描写〉

- (61) 小弁のときには決して豊かではなかった乳の出が、雲平のときには余るほどで加恵の両乳は誇らかに張っている。(華岡)

以上を整理して一般化した記述は以下のようなになる。

C-3 感覚描写動詞文

【命題】 [経験者(Ex)ノ肉体部分] ガ+V

【述語語彙】 {顔} が～ほてる, {皮膚・筋肉} が～張る, {目} が～くらむ, ……

【文機能】 V-T 〈感覚事象描写〉

V-tei-T 〈感覚状態描写〉

4.4 知覚描写動詞

「聞こえる、見える」といった知覚表出動詞が、主観的な知覚現象の表出であるのに対し、それに対応する「聞く、見る」などは、知覚現象を客観的に描写したものというよりは、「食べる、歩く」などと同じ一種の具体的な身体動作と連続している面が強い。対象格を二格で取る「耳を傾ける、目を向ける」やそれと同義の「(音楽を) 聴く、(映画を) 観る」などはまさにそうした身体動作と項構造が共通している。これらは意志動詞であるから、ガ格名詞句は経験者格ではなく、意志性をもった動作主格である。そのような場合には知覚描写動詞とするべ

きではない。

しかし、小説などで登場人物の知覚現象に感情移入して描写した例などは、身体動作の描写ではなく、知覚現象を描写したもので、動作主格ではなく、経験者格を取っていると見るべきである。その場合、知覚描写動詞と呼称するにふさわしい。

以下はそのような例である。いずれも第3人称の登場人物を経験者格とし（二重下線）、その知覚現象の内容が対象格として表現されている（波下線）。

〈知覚事象描写〉

- (62) 細君は驚いたように顔を挙げた。良人は今度は明かに細君の眼の光ったのを見た。そして見ている内に細君の胸は浪打って来た。(好人物)
- (63) 朝、寢床のなかで行一は雪解の滴がトタン屋根を忙しくたたくの聞いた。(雪後)

〈知覚状態描写〉

- (64) 喬は寝ながら、女が此方を向いて、着物を着ておるのを見ていた。見ながら彼は「さ、どうだ。これだ」と自分に確めていた。(ある心)
- (65) そして、彼は、予期したとおり、吹きとばされて小犬のように雪の上をころがった。見事な敗北だった。彼は雪の上に伏したままで、風の音を聞いていた。火口壁に衝突して起る音、雪面を摩擦して起る音、遠い音、近い音、あらゆる風の音の中に混って、空高くから聞えて来る音があった。(孤高)

このような例を〈知覚描写〉とするならば、話者自身の知覚現象についても、(60)のように「見える」ではなく、「見る」を用いるならば、〈知覚描写〉としてよいであろう。

- (66) 私は彼方から肥った女の人を乗せた一台の俵の来るのを何気なく見ていた。女の方は四十以上に見えた。はっきりした眼鼻立ちの色白で、でっぷりと肥った、如何にも豊かな感じの人だった。(冬の往)

問題は、身体的動作の「見る、聞く」と知覚現象の「見る、聞く」を截然と分けることができるのかどうか、また、両者を別語扱いとして語彙分類を隔てるべきか、一種の用法の違いのレベルにとどめるべきか、などである。ここでは、その典型的な例をもって語彙分類としておくことにする。

以上を整理して一般化した記述は以下のようになる。

C-4 知覚描写動詞文

【命題】 [経験者(Ex)] ガ+ [対象(Ob)] ヲ+ V

【述語語彙】 聞く, 見る, 見つける, 見分ける, 耳にする, 目にする, ……

【文機能】 V-T 〈知覚事象描写〉

V-tei-T 〈知覚状態描写〉

知覚表出動詞との間のボイス対立については、やはり3.2で述べた文機能論的ボイス対立となる。

(67) 知覚表出動詞 — 知覚描写動詞

[Ex]に[Ob]が聞こえる — [Ex]が[Ob]を聞く

[Ex]に[Ob]が見える — [Ex]が[Ob]を見る

知覚表出動詞の経験者格は二格で表れるので、ここではそれを記しておいた。

(62)~(65)の各用例を知覚表出動詞の構文に換えると、以下のようなになる。

(62) 良人には今度は明かに細君の眼の光ったのが見えた。

(63) 行一には雪解の滴がトタン屋根を忙しくたたくのが聞こえた。

(64) 喬には、女が此方に向けて、着物を着ておるのが見えていた。

(65) 彼には、風の音が聞こえていた。

いずれも、経験者格が第3人称であるので、文機能については、前二者が〈知覚事象描写〉で後二者が〈知覚状態描写〉である点は変わらない。

5. おわりに

本稿では、1節は筆者がこれまでに述べている感情動詞分類の再説であり、新たに主張する論点は2節、3節にて述べた。2節では、感情描写動詞文が第1人称経験者格を取り、なおかつ動詞がテイル形であっても、その文を〈感情表出〉とみなすことはできず、〈感情描写〉であるということを述べた。3節では、感情描写動詞の文法的特徴について、多岐にわたって論じたが、主に、感情表出動詞とのボイス的対立とテンス的対立に関する先行研究に対して、記述的な立場からの批判を述べた。その中で新たに提示した一つの論点は、「文機能論的ボイス対立」という現象を指摘したことである。その内容の詳細、及びその他の論点については、各小節において尽きているので、ここでは省略する。

後半の4節は感情描写動詞の語彙・用例などを記述することを目的とするものであり、特に結論に相当するものはないが、そのどの内容においても、前半で論じた文法的特徴を個々の事例をもって裏付けるものである。

付記

本稿は拙著(2000b)『日本語の述語と文機能』で今後の課題として残した論述に相当し(同p.273), 同書の4. 5節として収められるべき節を追補することを意図して執筆したものである。その意味では, 同書の第4章で詳述している「感情表出動詞」, 「感情変化動詞」と対比され, 体系的な位置づけのもとに読まれることを望むものである。また, 本稿をなすに当たり, 大阪外国語大学・三原健一教授より有益なコメントを頂いた。深く感謝致します。

注

- * 1 感情動詞分類については, 山岡(1998)で提案し, その後, 同(2000a), 同(2000b)でも言及している。
- * 2 堀川(1992), 吉永(1997), 三原(1999), 同(2000)などの先行研究では「心理動詞」という呼称が用いられているが, 筆者は感情形容詞との共通性に注目し, 両者に連続する現象を説明するために「感情動詞」と呼んでいる。また, カバーしている範囲も異なり, 先行研究の「心理動詞」は, 本稿の情意動詞にほぼ相当し, 思考・感覚・知覚の各動詞を含んでいないので, 「感情動詞」の方が範囲が広いことになる。一般的には, 「感情」より「心理」の方が広義と思われるが, 文法用語としての「感情」は, 感覚形容詞が感情形容詞に含まれるなど, もともと広義に用いられており, それを動詞にも拡大して用いることには必然性があると判断した。
- * 3 名詞句の述語に対する意味関係として, 本稿では意味格を用いる。今日では変形文法に取り込まれた意味役割が一般的だが, 筆者の一連の研究では格文法における基礎的な体系で十分である。本稿で主に用いるのは, 経験者格(Experiencer:略称Ex), 対象格(Object:略称Ob), 原因格(Cause:略称Ca)である。
- * 4 以前には「発話・伝達のもダリテイ」などと称されていた範疇, すなわち話者が発話に際して各文に担わせている対人的機能を, 筆者は文機能と呼ぶ。もダリテイが実質的に形式範疇であるのに対し, 文機能は特定の言語形式に依存せず, 文を構成する構造的要素群から複合的に発生する意味範疇である。〈命令〉や〈意志表出〉と並んで, 〈属性叙述〉, 〈事象描写〉, 〈感情表出〉など, 特定の文末形式に対応しない機能的意味も対等に文機能として扱う。山岡(2000b)で詳しく論じている。
- * 5 例文中の+[I]^{Ex}は, 形式上表れていないが, 実際の発話においては含意されている, 名詞句相当の人称意味(ローマ数字)と意味格(添え字)を表示している。
- * 6 筆者は山岡(2000b)1.3.5で, いわゆるハガ構文「象は鼻が長い」の「鼻が」のように, 主題(ここでは「象は」)の部分に当たるガ格名詞句を「部分ガ格」と呼んでいる。次に, 感情性述語は必ず経験者格を取るが, 感覚形容詞, 感覚動詞は, 経験者格の部分ガ格として, 肉体部分の名詞句を取るという文法的特徴によって規定される。
- * 7 時制辞に下接する接辞のことを筆者は付加辞と呼んでいる。もダリテイ付加辞は, 推量・伝聞などを表す「そうだ, ようだ, らしい, だろう」などを指す(山岡(2000b)1.1.2)。兆候や様態の「そうだ」は時制辞に下接しないので付加辞ではない。
- * 8 筆者は, アスペクト意味の名称として「~相」を用いている。継続動詞のテイル形

の意味を「継続状態相」、瞬間動詞（変化動詞）のテイル形の意味は「結果状態相」と呼んでいる。詳細は別稿に譲る。

- *9 すると、思考描写動詞としての「思う、考える」は補文を承けないことになるので、定義上、思考動詞ではなく、情意動詞に分類されることになる。しかし、①の構文の場合と、③の構文の場合とを同音異義語とみなすのにも無理があり、結局、各語彙の思考表出用法、思考描写用法のような扱いとして、両範疇にまたがって属すものとし、当該語彙として「補文を承ける」ことができるものとした。
- *10 「じれる、悩む」は山岡(2000b)4.3.2.1において、情意表出動詞の語彙としても挙げている(p.192)。この二語は、独立語文としての用法では〈感情表出〉となる語彙で、原因格名詞句を伴う述語としての用法では〈感情描写〉にしかならない。ここでは両範疇にまたがって属するものとし、用法によって類別されるものとする。「落ち着く、迷う」などもこれに類するものと考えられる。

用例出典

出典の略号をカッコ内に示す。出典を明記しないものは作例。用例中の〔 〕は引用者による補い。(引用順)

(友情) 武者小路実篤「友情」、(袈裟) 芥川龍之介「袈裟と盛遠」、(エディ) 筒井康隆「エディプスの恋人」、(こころ) 夏目漱石「こころ」、(一瞬) 沢木耕太郎「一瞬の夏」、(さぶ) 山本周五郎「さぶ」、(若き) 藤原正彦「若き数学者のアメリカ」、(人間) 太宰治「人間失格」、(塩狩峠) 三浦綾子「塩狩峠」、(あすなろ) 井上靖「あすなろ物語」、(太郎) 曾野綾子「太郎物語」、(二十歳) 高野悦子「二十歳の原点」、(青春) 石川達三「青春の蹉跎」、(人民) 星新一「人民は弱し、官吏は強し」、(沈黙) 遠藤周作「沈黙」、(楡家) 北杜夫「楡家の人びと」、(二十四) 壺井栄「二十四の瞳」、(路傍) 山本有三「路傍の石」、(金閣寺) 三島由紀夫「金閣寺」、(風立) 堀辰雄「風立ちぬ」、(華岡) 有吉佐和子「華岡清洲の妻」、(世界) 村上春樹「世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド」、(山本) 阿川弘之「山本五十六」、(運) 芥川龍之介「運」、(越前) 水上勉「越前竹人形」、(痴人) 谷崎潤一郎「痴人の愛」、(泥濘) 梶井基次郎「泥濘」、(孤高) 新田次郎「孤高の人」、(冬の蠅) 梶井基次郎「冬の蠅」、(ビルマ) 竹山道雄「ビルマの豎琴」、(砂の女) 安部公房「砂の女」、(錦繡) 宮本輝「錦繡」、(好人物) 志賀直哉「好人物の夫婦」、(雪後) 梶井基次郎「雪後」、(ある心) 梶井基次郎「ある心の風景」、(冬の往) 志賀直哉「冬の往来」以上、『CD-ROM版・新潮文庫の100冊』より

参考文献

- 金田一春彦(1950)「国語動詞の一分類」『國語學』第15集(金田一編(1976)所収5-26)
 ———編(1976)『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房
 工藤真由美(1995)『アスペクト・テンス体系とテキスト』ひつじ書房
 中右 実(1987)「説明理論のためのモダリティの概念」モダリティ研究会レジメ
 ———(1994)『認知意味論の原理』大修館書店
 ———(1999)「モダリティをどう捉えるか」『言語』第28巻第6号 大修館書店 26-33
 堀川智也(1992)「心理動詞のアスペクト」『北海道大学言語文化部紀要』21 187-202
 三原健一(1999)「日本語心理動詞の非非対格性」『日本語・日本文化研究』第9号 大阪外

国語大学日本語講座 45-59

- (2000)「日本語心理動詞の適切な扱いに向けて」『日本語科学』第8号 国立国語研究所 54-75
- 森山卓郎(1983)「動詞のアスペクチュアルな素性について」『待兼山論叢』17文学篇 1-22
- 山岡政紀(1998)「感情表出動詞文の分類と語彙」『日本語日本文学』第8号 創価大学日本語日本文学会 (1)-(17)
- (1999)「感情表出動詞の文法的特徴」『日本語日本文学』第9号 創価大学日本語日本文学会 (47)-(59)
- (2000a)「感情変化動詞の語彙と文法的特徴」『日本語日本文学』第10号 創価大学日本語日本文学会 (33)-(43)
- (2000b)『日本語の述語と文機能』(主として, 1.3「格助詞と意味格」, 2.4「日本語の文機能の概観」, 第4章「感情動詞文の機能論」に関連)
- 吉永 尚(1997)「心理動詞の意味規定とその特性について」『日本語・日本文化研究』第7号 大阪外国語大学日本語講座 81-98

Vendler, Zeno (1967) *Linguistic in Philosophy*: Cornell University Press

(やまおか・まさき, 本学助教授)